

● フライブルク環境先進視察レポート2015

団員 上杉 昌弘

1. はじめに

松山市は平成18年度から人口50万人以上の都市で、1人1日当たりごみ排出量最少を続けておりますが、ドイツでは、まず、ごみを出さないことが大事と考えられており、次に分別・リサイクル、そして、その次としていかに環境に負荷を与えず処理するかということが当たり前のこととなっております。

今回、フライブルクにおいて、幼稚園児や小学生はじめ、市民の環境意識を高める施策及びその手法を視察して参りましたので報告します。

2. エコステーションについて

エコステーションは、1986年にフライブルク市の環境教育施設として設立され、ごみ・環境ビジョン21でお馴染みの環境NGO『BUND』（ドイツ自然保護連盟）が運営しています。

ここの周辺には、湖公園や市民集会所が整備されているとともに、日本庭園も造られ市民の憩いの場となっております。



(エコステーション)



(ハーブ園)

また、ここで使用されている建材は、全てが自然そのもので、丸太造りに、壁は自然石と粘土を使用し、屋根は草を使って屋上緑化されております。

部屋の中心には八角形のホールがあり、南側は窓ガラスを多くして、できるだけ太陽光を取込んでいました。また、

長い日照時間を活かして太陽光発電で施設の電力をまかない、さらにソーラー給湯、バイオガスにて冬の暖房を補助しております。

5,000㎡の広大な庭は、自然に近い形で保たれていて、ハーブ園や野生ミツバチの産卵用ボード、コンポスターなどが設置されております。

3. 緑の教室

この教室は、「現代の生活の中で、自然と出会い、自然の素晴らしさに改めて感激してもらいたい、何故ならば自然を知り愛する者が自然を大切にするのだから。」をコンセプトに、1クラス20から25名の子どもたちが、特別授業として受けま



(環境教育が行われる「緑の教室」)

す。

環境教育とは、頭と手と心を使うもの。「聞くより見ること、見るよりすること」であります。例えば、土を虫めがねや顕微鏡を使ってよく見ると、手のひらいっぱいの中には、地球上の人間より多い微生物がいることを実感できます。加えて、緑の教室では健康な食事をテーマに、野菜の種まきや収穫を体験し、有機野菜のラベルの見方を学ぶことができるなど、多様なプログラムがあります。

4. ドイツ人の環境意識

環境先進国として各国の模範となるドイツでは、国民が高い環境意識を持ち、政治や産業に対し、環境保護の観点から常に監視の目を向けています。1971年に連邦政府は、動植物の生態系を守ることを決めた「環境保護計画」を発表し、その後の環境関連法令の基礎としました。

そして、子どもたちに小学校から環境教育を実施するという「環境教育計画」を発表しました。これ以降、子どもころから環境教育を受けた大人たちが現在の世論の核となり、政治を動かす法規制を通して、さらに環境保護がドイツ

で定着していきました。

具体的には、石油から生産される燃料（ガソリン・軽油等）と電力消費を課税対象とし、日本の倍近い課税がなされており、消費者は相当大きな負担となっております。

しかし、こうした取り組みから、幅広い公共交通網の整備やカーシェアリングの拡大、自然エネルギーの研究開発など、環境負荷の軽減に大きく寄与しております。

また、このドイツ環境税の特徴として、税収のすべてを環境対策費に充当させるのではなく、むしろ、そのほとんどを年金財源などの社会保障費や雇用対策に充てております。

日本と違い、持続可能な発展を実現させるために、エコロジーに配慮した社会システムの構築と適度な経済成長、そして、充実した社会保障システムに基づく社会の安定化を目指した、バランスのとれた政策方針であるといえます。

5. まとめ

今回、視察を通して感じたことは、ドイツと日本、その時代背景が大きく影響して今日に至っているということでもあります。

ドイツでは、1960年代の公害問題、1970年代の原発反対運動がきっかけとなり、環境意識が向上しました。

一方、日本では戦後の焼け野原の時代から、大量生産・大量消費、右肩上がりの国民総生産、失われていくものより、生み出されていくものばかりに国民の目が向いていたのではないのでしょうか。

現代のように、利便性のみを追求するのではなく、地球規模で進んでいる温暖化に対して、地方自治体としてなんらかのビジョンを持って取り組むことは間違いなく必要であり、行政に携わる者としては、今後、環境対策や環境教育の重要性を常に意識させられる有意義な視察でありましたことをここに記して、報告とさせていただきます。